

「いのちのケハイ」

田島征三

愛知県の刈谷市美術館で2022年3月から6月にかけて開催された「田島征三アートのぼうけん展」が今、新潟市立新津美術館で7月30日から9月25日まで開かれている。この新津美術館では15年前、ぼくの双児の兄弟田島征彦と二人展をさせていただいた。その時、征彦が使っていた部屋も含めて今回はぼくが全館独占させていただいているので、ゆったりとした展示になっている。

刈谷市美術館での展示は、当館の学芸員、松本育子さんが約2年をかけて日の出町のぼくが30年暮らした倉庫状態の家屋から群馬県下仁田町からお借りしている倉庫、伊東市の自宅のロフト等々から60年以上にわたるぼくの作品をセレクトし、国立図書館等でその他の作品資料を調査検証してくれた驚異の回顧展であっただけに、鑑賞された皆さんは大満足してくれたのだが、ぼくは自分自身の足跡があまりにも遠い昔へ旅するので漠然と見てしまったため、整理がつかなかった面があった。が、今回の新津美術館の場合、2つの広いフロアで見られたため、解りやすく感覚的であった。不満があるとすれば、それは、ぼくの過去の作品ばかりで「これから」の作品がないことだ。でもそれはムリ、これからの作品はまだ存在していないからだ。

ところが、同じ新潟県で、ぼくの「これから」も見ることができるとい現象が起こった。同じ日に始まる「いのちのケハイ」（7月30日～11月13日）だ。すなわち、刈谷展以降ぼくが創った巨大和紙(6m×2m)による作品、鉄の彫刻作品4点(3.5m×5m)が、同じ新潟県十日町市の山あいの村（鉢集落）にある「絵本と木の

実の美術館」の体育館と美術館の外空間、ビオトープの池、田んぼ、小川、やぎのいる場所に展開している。

越後妻有アートトリエンナーレ「大地の芸術祭」がコロナの関係で1年延期になって今年がその年になってしまったのだ。実は「アートの冒険」をしているのはこちらの展示作品で、特に鉄の彫刻作品は、今年

初めての挑戦！しかもこれら4点は、水の中にしか生きられないモノたちへのオマージュなのだ。谷古入の森が巨大処分場にされた時、トウキョウサンショウウオやホトケドジョウが生き埋めにされた。彼らは逃げる事が出来なかったのだ。

谷戸沢処分場が出来た年、平井川でオイカワが2000匹浮いた。その後、釣れるフナの身体がことごとく曲がっていた。水の中にしか生きられないモノたちは、流れてくる水が毒であっても、それしか飲む



ことが出来ないのだ。

地球温暖化、異常気象！！未来の子ども達も、この地上から逃げられない。4体の鉄彫刻は、我が水の星に棲む全てのモノたちへの想いを表現した。

鉄による作品「冬の話をする樹」
(制作協力：鞍掛純一)